

Ⅲ 先輩からのメッセージ

こんな経験をしてきました

入省して20年近くいろいろな経験をしてきました。数理職の公務員という仕事に少しでも興味を持って頂けるよう、これまでの私の経験の一部をご紹介します。私がこれまでたずさわってきたのは大きくは社会保障関連だと思いますが、社会保障のコアとなる分野やそれを補完する分野など、様々な分野があったと思います。

社会保障のコアな分野としては、公的医療保険制度や生活保護がありました。

健保や国保などの公的医療保険制度では、生涯医療費と言って日本人が平均的に一生のうちに使う医療費はいくら位で、一番多く使うのは人生のどの段階かを算出したことがあります。結果は数千万円規模で、人生の終盤が一番多く使うのです。他には、このまま行くとならばわが国全体の医療費は将来どれくらいになるかを見通したこともありました。これは国民経済全体と比べて医療費だけが突出して伸びていかないかという視点から分析したものです。どの分析も、自分が作る生の数字によってわが国の医療の実態を色々見ることができるのが非常に面白いと感じました。

生活保護については、医療の自己負担がないため無駄な受診が生じるのではないかとといった指摘があったことから、生活保護を受けている人の医療受診動向の分析をしたことがあります。結果的には自己負担のある医療保険加入者と比べて受診頻度が高い訳ではないことが分かりました。この分野で一番大変かつ一番興味深かったのは、生活保護支給額基準の検討です。これは、生活保護費の支給額が一般の低所得世帯の消費実態と公平になっているかという観点から統計学的・計量経済学的に一般の低所得世帯の消費のパターンを見出して生活保護費の支給基準と合致しているかを調べたものです。生活保護費の設定に実際に活用されています。

一方、社会保障のコアな部分を補完する企業年金や個人型の年金、保険・共済といった分野も経験しています。

企業年金の分野では、それを用意する企業が設定した運営方針書類が法令に照らして問題ないかを審査する、その財政状況をチェックするといった監督業務が主でした。しかし、その中で企業側とやり取りする中で企業が自社の人材確保や福利厚生をどう考えているかをお聞きすることもあり、企業経営との密接な関連が実感できました。

国民年金基金などの個人型の年金や保険・共済の分

野は、社会保障の上乗せという意味では企業年金と同様ですが個人が任意に加入する仕組みで、運営主体の監督業務が主です。これは保険会社などに安定的な運営を促すことによって契約者の保護を図るものですが、規模の大きい運営主体であるため金融市場への影響なども考えながら監督する必要があり、数理的事項とともに経済一般のことを踏まえた総合的なセンスが求められるexcitingな分野です。

これまでを振り返ると、どの分野でも数理的な素養を活用できる楽しさがありました。さらに、一つの分野で経験したことが他の分野で活用できることが多々ありました。例えば公的医療保険制度の分野で身に付けた分析のノウハウは生活保護の医療の分析に活用できましたし、共済の分野で学んだ会社法や会計基準の知識が企業年金の分野で役立ったこともありました。また私は海外留学の機会を与えていただき、経済理論を学んだり諸外国の政府から来ている同級生と議論ができたりと、見識を広げることができました。

この欄をお読みになってこうした仕事にご関心を持たれた方は、厚生労働省を目指されてみてはいかがでしょうか。あなたの数理的なセンスを活用して政策形成に関与できるフィールドが待っています。

金融庁監督局保険課保険財務会計基準専門官

西尾 穂高



経歴

- 平成 9. 4 厚生省入省（保険局調査課）
（平成16.7～18.6 米 コーネル大学留学）
- 平成19. 7 社会・援護局地域福祉課消費生活協同組合業務室長補佐
- 平成22. 7 社会・援護局保護課長補佐
- 平成25. 7 年金局企業年金国民年金基金課基金数理室長補佐
- 平成27.10 現職